

〈貧困〉のリアル、文学のリアリティ —アメリカ文学と希望のレトリック—

中谷ひとみ*

1. 〈貧困〉のリアル、文学のリアリティ

日常生活で不安や恐怖心が募るのはそれを引き起こす原因が不明だからであり、それを特定できれば、そのような感情は薄らぐという。原因を知ることによって精神的に余裕ができ、客観的に分析すれば不安や恐怖の原因となっていたものが故なきもの、あるいはたわいないものだったことが分かり、対応策なども見えてくるからだ。事態は明確にされなければならない。しかし恐怖小説などを読んでいて、恐怖などの感情が最も強く、あるいは効果的に喚起されるのは、描写が詳細すぎず、読者が想像力を十分に発揮できる時だという。このとき、読者は自ら恐怖の物語のシナリオを書いていると言ってよい。言語で過度に克明な描写をすることは、むしろ害をなす。読者のこの創造的な行為を阻害するからだ。

〈貧困〉が描かれる場合はどうであろうか。労働者階級に比較的多く〈貧困〉が見出されるとすれば、「労働者階級の文学」がそのような体験を「^{representation}表象することは特に重要である。」なぜなら、Tokarczykによれば、「労働者階級の^{life}生—家族、仕事、経済的苦闘—が、論争の主流から排除されるか、風刺されるかのいずれかであるからだ。」(6)

Representation is particularly important because many aspects of working-class lives —family, jobs, economic struggle—are either left out of mainstream commentary or caricatured. In comparing working-class writing to documentary photography, Zandy suggests the writer is like the photographer capturing “what is” with his/her artist’s eye, capturing the subject from the right angle and composing it through his/her vision. (6)

確かに” what is” —〈貧困〉のリアル—を詳細に描写することで、個人的あるいは家庭の状況や社会的問題などを正確に把握することが可能になり、その原因や対策などを考察するきっかけになるかもしれない。社会的不正や腐敗を暴露して社会変革の一助となるかもしれない。社会派小説として十分に機能するかもしれないし、そこに文学の価値を見出すこともあろう。しかし、それが目的であったとしても、^{リアリスティック}写実主義的に微に入り際にわたって貧困状況を記述し、何らかの改善を訴えたり提案したりすることは、論説/論文や直接的な提言とどう違うのか。そのような小説は最善の方法だろうか。また、効果のほどはどうだろうか。文学の主要なテーマとして〈貧困〉を選択し、

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

それを写實的に描写することに内在する問題は、それが読者の興味・関心を持続させ、文学作品のプロット展開の牽引力として十分効果的に機能するかであろう。また、はたして読者はそれを求めるだろうか。恐怖小説の読者に恐怖心を喚起するためには描写が克明すぎないのがよいとすれば、〈貧者〉に対する共感や憐憫の情を引き出し、福祉などの社会政策を実現させるという副産物まで生むには、感傷性と同様、過度な写実は望ましくないことになる。

〈貧困〉と言っても、一人当たり年間所得が370ドル以下、あるいは一日1.25米ドル未満で暮らす人の比率（国際貧困ライン）とする世界銀行の定義など、定義は様々あり、絶対的基準と相対的基準の捉え方などもある。相対的貧困とはある地域社会の大多数よりも貧しい状況であるが、ますます漠然とした定義のように思える。本論では〈貧困〉を、主に経済的理由で生活が苦しく、必要最低限の生活もおぼつかない状態と広く捉えたうえで、アメリカ文学を概観してみたい。考えてみなければならない問題はいくつかある。〈貧困〉がそれ自体独立して、文学の主要なテーマとなっている顕著な例が多くあるか。読者を惹き付け、期待にこたえ、読了させる原動力となりうるか。そして、そのような作品は文学市場で持続可能か、などである。確かに「小説中、貧困が十分に描かれていない」などの批評は可能だし、実際見ることもある。しかし、いかに斬新な方法であろうと―その具体的方法は思いつかないが一陰鬱な内容にちがいない貧困状態をこれでもかこれでもかと写実主義的に描写すれば、むしろ読者は引いてしまうだろう。読むのを途中で放棄するかもしれない。アメリカ文学の中で〈貧困〉のみを主要なテーマとして写實的に描写する作品が多くはないとすれば、その理由はそれが取り扱い要注意テーマ/モチーフだからではなかろうか。文学では、「救い」や「希望」がないことで批判されることもある。

ピューリタニズムとフロンティア・スピリットの精神風土を土台に、アメリカ国家は建設された。1620年のメイフラワー号の Pilgrim Fathers やそれに先立つ1607年のジェイムズタウンに始まる John Smith たち入植者たちの生活環境は例外なく苛酷で、彼らは荒れた大地、厳しい気候、過酷な労働、そして〈貧困〉に耐えた。人々は文学を読む余裕もなく、ピューリタニズムは小説や演劇鑑賞などは禁じていたから、この頃のアメリカ文学はほとんどが植民地の歴史、旅行記、報告書、説教集などの宗教的著作物である。密かに小説を読みたければ、輸入されるイギリス小説や海賊版を読んだという。1776年の独立以後ようやくアメリカにも職業作家が生まれるが、アメリカ独自の文学が開花するのは1840、1850年代を中心とする American Renaissance の頃である。しかし、ある程度生活に余裕ができて、小説の読者が多くは家庭婦人だった頃なら、女性的美徳やモラルを示唆する説教くさい家庭小説や感傷的な小説が流通することになり、〈貧困〉のみを主要な小説モチーフとする小説はますます遠ざけられたと推測する。

貧しくとも愛情と家族の団結で乗り切ってゆく家族が描かれ、読者を獲得することがある。例えば *Little House in the Big Woods* (1932) に始まる、Laura Ingalls Wilder (1867–1957) による『大草原の小さな家』シリーズ全9作である。原作とは違う点も多いが、テレビ化もされた。少

年少女向けの著作と考えられているが、危険なインディアン、病気、身近な死、干ばつなどの気候風土と農業の困難なども描かれる。このような陰鬱で重い内容も含むが、読者の印象に残るのは〈貧困〉そのものというよりは、家族のあり方、親子関係、愛情や勤勉、共同体などである。日々の重労働のなかにも楽しみはあり、クリスマスには親戚が集まって楽しいひと時を過ごし、家族の団欒も描かれる。悲劇に“comic relief”が必要のように、〈貧困〉が描写されても、あるいはそれが小説の主要な背景であっても、「息抜き」が必要である。いや、むしろ、この「息抜き」や楽天的な言説が、アメリカ人らしさと言えるのではないか。

家柄/身分も学歴もない貧しい少年でも勤勉に働き、努力すれば報われ、成功者となって豊かな生活を送れるという“American Dream”は、アメリカ人が厳しい現実と直面してきたという歴史があるからこそ、人々の心を捉え続けて来た。それが、「先住民族の駆逐、クエーカー教徒迫害、魔女狩り、奴隷制、性差別、人種差別、自然破壊などを糊塗することで成立している」（笹田 他編9）にもかかわらず、である。「アメリカの夢」という文脈からも、〈貧困〉を主要なテーマとして伝統的なリアリズム手法で書くような小説一本論は主として小説に言及する一は困難と言えるであろう。アメリカの読者に敬遠される傾向があると思えるからだ。むしろ、アメリカ文学においては、〈貧困〉から文学が始まると考えるべきではないか。それに焦点が当たり続けたり、それが首尾一貫した文学的テーマで終わるわけではない。より重要な問題意識やテーマが作者にあれば、〈貧困〉は小説の背景幕の風景の一部となる。とは言っても、〈貧困〉のリアルが文学作品の背景や状況設定の重要な要素になることは否定できない。貧困状況のなかで、登場人物たちがいかに生き一人生を切り開いたり、破滅させられたり—いかに考え、行動するかが描かれる。人はどう生きるかが問われ、どんな社会をめざすべきかなどを考えねばならない。〈貧困〉はこのような大きなテーマと直結するのだ。また、言語表現としてその卓越したリアルさの表現に成功すれば、言語芸術としての洗練度は高く評価されるだろう。社会批判として大きなインパクトを与え、社会変革の原動力となる可能性もある。

本論はアメリカ文学における〈貧困〉を考察する一つの試みである。〈貧困〉が主要なテーマというよりは、そこからどんな文学言説が生まれ、それがどこに向かい、到達しようとしているのかを考える。〈貧困〉のリアルはアメリカ国家、人間、社会などの文学のリアリティを醸成する土台の一つであり、そこから様々なテーマが開花/発展してゆくことを検証したい。そこにはアメリカらしさ、アメリカ文学の独自性なども見出せよう。アメリカのそのような文学状況を知れば、日本における〈貧困〉問題や日本人のメンタリティなどを考えるきっかけとなり、さらにはグローバル経済やテクノロジー社会に生きる現代人、そして国内の富者・貧者の可能な共存のありかが見えてくるかもしれない。本論の第2章の1ではアメリカ文学を概観し、〈貧困〉から生まれる文学性の例を列挙してみる。続く2-2と2-3では、少年少女が中心人物で、主として児童向けと考えられている小説二作品を読み、アメリカにおける〈貧困〉と子ども、そして大人の考えや価値観や社

会を考察する。「児童文学」にとどまらない広がりを持つことがわかるであろう。第3章は、超富豪で投資に失敗して極貧になる主人公が登場する、Don DeLilloの現代小説 *Cosmopolis* (2003) に焦点を当てる。〈貧困〉問題は金持ちになれば解決するのだろうか。人は金持ちに、さらに超富豪になればどう変わり、そこから転落するとどうなるのか。考え、意識、身体などは変化するのか。変化するとすればどう変わり、それは何を意味するのか。この小説読解を通して、身体が〈貧困〉の対抗ナラティブ/言説と希望を準備すること―身体が貧富の二元論言説の代替となりうること―を論じる。そして最後に、〈貧困〉から始まるアメリカ文学とアメリカ人のメンタリティに言及して、まとめにかえたい。

2. 〈貧困〉とアメリカ文学

2-1. 〈貧困〉から文学が始まる

アメリカ文学において、〈貧困〉と「^{American dream}アメリカの夢」は密接な関係にある。それを実現した元祖とも言え、建国の父の一人で、政治家、外交官、科学者でもあった Benjamin Franklin (1706-90) の著作は、〈貧困〉のなかの生き方指南と考えられる。彼の人生や文学は〈貧困〉から、そして18世紀という理性の時代、神を中心とするピューリタニズムとは大きく異なる人間中心主義のなかで始まったと言ってよい。彼が〈貧困〉に喘いだとは言えないだろうが、貧しさから教訓本、エッセーなどの文学作品、そして批判精神などの文学的感性や感受性が培われたのは事実であろう。人と人との関係における真実と誠実と人徳が幸福を生むと信じる彼の *The Autobiography* (1818) は、貧しい環境に生まれながら、独学し、自活し、勤勉と節約で人生を切り開いてきた自身の人生を振り返ったものであり、*Poor Richard's Almanack* (1732-57) の暦は、その諺や人生訓/忠告、辛辣な人間観察などの記述が大衆に好まれ、大ベストセラーとなる。格言は後に *The Way to Wealth* (1757) としてまとめられ、13の徳目(節制、沈黙、規律、決断、節約、勤勉、誠実、正義、中庸、清潔、平静、純潔、謙譲)は、以後のアメリカ人にも、文学作品の登場人物にも影響を与える。

〈貧困〉からどういう文学的テーマが生まれてきたかという問題系を考えるために、もしばらく〈貧困〉から始まるいくつかのアメリカ文学作品を逍遙してみよう。

アメリカ文学史には、自ら清貧を選択し、独自の文学世界を開拓する人も現れる。例えば Henry David Thoreau (1817-62) や Walt Whitman (1819-92) である。前者の *Walden: or, Life in the Woods* (1854) は Walden 池畔の森に丸太小屋を建てて自給自足の生活をした2年2ヶ月を記録したものであり、奴隷制とメキシコ戦争に抗議するため、人頭税の支払いを拒否し、投獄された彼の主張が語られるのが“Civil Disobedience” (1849) である。旅行記、エッセー、日記、書簡集などには独自の世界観がうかがえられ、ネイチャー・ライティングのさがけと捉えられている。後者の *Leaves of Grass* (1855-92) はあからさまな性的表現として「猥褻」とされるも、作者は「自

由詩の父」と呼ばれ、“Song of Myself” (1855) の自己礼賛のインパクトは強い。

I celebrate myself, and sing myself,
And what I assume you shall assume,
For every atom belonging to me as good belongs to you. (Baym et al eds. 2048)

Walt Whitman, a kosmos, of Manhattan the son,
Turbulent, fleshy, sensual, eating, drinking and breeding,
No sentimentalist, no stander above men and women or apart from them,
No more modest than immodest. (2064)

清貧の暮らしのなかで内省を深めた結果の、ロマンティストの雄叫びと言ってもよからう。

ビート世代も、アメリカ社会や物質文明に抵抗し、批判精神を露にする。貧しいなかでアメリカに対して怒り、正しい生き方を模索し続ける。仏教に生きるよりどこを求めたりもした Allen Ginsberg (1926-97) は、同性愛の友人を破滅させたアメリカの物質文明に対する怒りを、“I saw the best minds of my generation destroyed by madness…” で始まる “Howl; for Carl Solomon” (1955; 出版1956) のなかで露にし、アメリカを糾弾する。

〈貧困〉などが人の人生を決定づけるという決定論の考えのもとに書かれる自然主義文学からは、興味深い小説が現れる。新しい女性の生き方である。アメリカ初の自然主義小説と言われる Stephen Crane の *Maggie: A Girl of the Streets* (1893) では、New York スラム街生まれの心優しい女性主人公が、ボーイフレンドからも母からも見捨てられ、街の女となり、最後には投身自殺する。典型的な、伝統的で「弱い」女性だ。彼女とは異なり、Theodore Dreiser (1871-1945) の *Sister Carrie* (1900) のヒロイン Caroline Meeber (通称 Carrie) は同じ女性でも、自分の性的魅力を利用し、男を犠牲にして舞台で成功する。一方、かつては酒場の経営者だったその男は、彼女に見捨てられ、自殺する。男を利用しながら社会的成功を勝ち得ていく彼女のしたたかさと生命力が描かれる、女性の成功物語—排除されてきた女性の「アメリカの夢」の成就—である。男社会のジェンダー・バイアスや価値観ゆえに、出版社が見つからず匿名で自費出版した経緯があるが、フェミニズム的観点からは大いに歓迎される人物造形であり、^{characterization} キャリーの力強さはこれまでにない小説テーマと女性の描き方の到来を示している。ドライサーの後年の小説、*An American Tragedy* (1925) には、環境一人種の出自—が人の運命を決定するという決定論思想が色濃く反映されているから、キャリーのような女性の人物設定はドライサー小説世界でも新しい試みであり、小説史上でも特異であるが、彼女にとっては〈貧困〉は力であり、可能性である。そのようなメッセージもこの小説は持っている。

〈貧困〉の中であがきながら生きる労働者とその一家を描写する小説が、アメリカにおいて法律をも作らせたことは、〈貧困〉と文学と社会の密接な関係をあらためて浮き彫りにする。社会

の不正を暴き立てる“Muckrakers”の一人である Upton Sinclair (1878–1968) の *The Jungle* (1906) は、シカゴの不衛生な食肉工場の実態とそこで搾取される貧しい労働者の物語であるが、朝食時にこの小説を読んでいた時の大統領 Theodore Roosevelt は即刻27歳の著者をホワイトハウスに呼び、詳細を聞きだし、その年(1906)年のうちに純正食品・薬事法が制定されたという逸話は人口に膾炙している。(猿谷 169–71参考) 小説は〈貧困〉問題から端を発し、過酷な労働やあざとい資本家や不衛生な食品生産の実体の暴露・糾弾で弾みがつき、社会主義や階級闘争も視野に入ってくる。法律制定という意外な波及効果にまで発展するが、忘れてはならない要素もある。アメリカ文学の重要な特徴の一つである移民の問題がここでもクローズアップされることである。リトアニア移民である主人公 Jurgis Rudkusは労働者としての個人的抵抗の限界を知っていくが、苦しい日常のなかでも、家族やリトアニア共同体への繋がりを求め、そこに安らぎを得る。移民とその祖国の文化が、貧しさや階級闘争における希望の可能性として存在しているのである。資本主義の矛盾露呈という時代の要請に応えた小説であり、移民の国アメリカらしい小説であると言える。

1929年ニューヨーク株式市場での大暴落から始まる大恐慌時代は、極貧から大金持ちへという「アメリカの神話」がもはや信じられない時代に、文字通り「夢のまた夢」になっていく時代である。この時代を背景にした John Steinbeck (1902–68) , *The Grapes of Wrath* (1939) は大恐慌と重なる1930年代を背景とする。恐慌と大規模機械化・資本主義農業と中西部で深刻化するダストボール(土地の荒廃による砂嵐)によって流民となる主人公たちは、カリフォルニアに到着しても〈貧困〉から脱することができない。大恐慌時代というアメリカの現実と故郷を追われた一行の苦難に即して示唆されるのは、ステレオタイプではあるが、家族の愛情や忍耐という美点であり、それらを重んじるアメリカの価値観がうかがえる。

以上の例のように、〈貧困〉から始まるアメリカ文学が、自伝や大衆向け生き方指南、都市生活や物質文明に対するアンチテーゼとしての生き方模索、人間/自己礼賛、女性の新しい生き方、移民問題、家族の愛情や団結、民族の誇りや拠り所となる共同体と慰安など、様々な問題/テーマに発展・帰結していくことが分かる。国家、社会、人間などにまつわる問題を露呈させ、あるいはあぶりだす文学的装置の一つが〈貧困〉である。あぶりだされるもののなかには、〈貧困〉と直接関連した都市やゲットーなどの経済・社会問題のみならず、移民、ネイティブ・アメリカンやマイノリティなど人種の問題、奴隷制などアメリカ独特の問題も含まれる。〈貧困〉がそれらの問題と連携・提携しながら、アメリカ文学世界が展開するが、それらのなかに何らかの希望が存在することを見落としてはならない。

2-2. 子どもたちに正しい生き方を教える大人たち—

〈貧困〉から大人の価値観が見える

アメリカ文学を俯瞰してきたが、今度は視点を変えて、少年/少女が主要な登場人物で、児童向けと考えられている小説について、その意図やそれが示唆するものを考えてみよう。Horatio Alger Jr. (1832-99), *Ragged Dick or, Street Life in New York with Boot Blacks* (1868) は、少年少女たちに広く読まれたベストセラーである。孤児で靴磨きの「ぼろ着のディック」が、裕福で親切的な Frank とその伯父でフランクリン流の成功への道を説く Mr. Whitney との出会いを機に、自らの生活を改め、立派な人間になろうとし、努力の結果、だんだんと良い職にもつけるようになっていく。この小説の成功の後、柳の下のだジョウを狙い、出版社は次々と似たような作品を出版し、「アルジャーの小説は、死後も、彼の名前でゴーストライターによって書き継がれていた。」（渡辺 第Ⅱ巻 120）この現象は大人たちの少年少女たちに対する純粋な教育的意図・配慮や時代の社会的要請というよりは、出版業界の狙いゆえではあろうが、この「児童向け」小説には当時の社会のあり様のみならず、社会や教育などに対する大人たちの考えや価値観や社会規範が書き込まれていることに注目してみよう。

少年のあるべき姿は、小説のなかでどう捉えられているのだろうか。語り手は、ディックが「あらゆる点で模範的というわけではなく、田舎から出てきた少年たちに時々悪戯したり、都会に不慣れた老紳士に違った道を教えたりする」（5）と述べる。また、「金銭感覚が乏しく、大人のようにタバコを吸う習慣があり—しかも、値段が高くて自分の気に入ったタバコを吸う—ギャンブル場で遊びもするが、これらが積もり積もれば、大きな出費になることをあまり考慮しない点では、堅実とはいえない。気前よく仲間や友人たちに奢ったりもする」と指摘する。しかし「欠点があるにもかかわらず、卑劣な（“mean”）ことや不名誉な（“dishonorable”）ことは決してしない美点がある。盗んだり、だましたり、自分より年下の子どもたちを威圧したりせず、率直で（“frank”）、まっすぐ正直で（“straight-forward”）、男らしく（“manly”）、独立独歩（“self-reliant”）の、気高い（“noble”）性質の持ち主であり、少年少女の皆さんが見習うべき点がある。私の若き読者たちが彼を好いてくれればと思う」（6）と語る。

I have mentioned Dick's faults and defects, because I want it understood, to begin with, that I don't consider him a model boy. But there were some good points about him nevertheless. He was above doing anything mean or dishonorable. He would not steal, or cheat, or impose upon younger boys, but was frank and straight-forward, manly and self-reliant. His nature was a noble one, and had saved him from all mean faults. I hope my young readers will like him as I do, without being blind to his faults. Perhaps, although he was only a bootblack, they may find something in him to imitate. (6)

少年少女を想定して語りかける語り手は、「ディックの欠点に盲目になってはいけないこと、欠点はあるがそれでも美点があり、その立派な性質が欠点を帳消しにしていること、靴磨きの少年に過ぎないが、見習うべき何かがある」（6）と主張する。しかしディックが、生まれつき器量が良いことは注意しなければならない。「朝、顔や手を洗うようなことはせず、汚れてもぬぐおうともしない—必要も感じない—そしてぼろ着であるから、薄汚い外見ではある。しかし、どこか魅力的なところがある。清潔でちゃんとした服装なら、器量良く見えるのは疑いがない（“decidedly good-looking”）。」ディックの仲間の少年たちが、「ずる賢く、信用できない顔立ちである」

（4）のとは大違いなのだ。生まれつき顔立ちが良いことが示唆するように、成功するには「忍耐を持って生まれ、容易にひるまない」（68）などの良い気質を持っていることが必要であるが、その「良さ」が顔にも表れると考えてよからう。成功するには条件があるのだ。このような決定論あるいは偏見を、少年少女に向かって語りかけている大人の語り手、そしておそらく小説の作者や当時の大人たちが持っていることが推測できる。元々良き性質を持って生まれなければ、成功はおぼつかない。そしてそれは顔相の良し悪しで判断もできる。

それでは、どんな人間・大人になるよう、青少年は期待されているのか。社会で何をするのが「良い」人で、何が「成功」と言え、成功するには何が必要なのかを考える際、読者は“respectable”という語や同様の意味の語が小説のなかで何度も言及されていることに気がつく。例えば、善意の持ち主である大人の登場人物は、自分の経験をも語りながら、努力の大切さをディックに説き、忠告する：「暇を見て本を読み、勉強をし、知識を蓄えること」が大切である。

「どんな労働も尊敬に値する（“respectable”）から、自分の仕事を恥じることはないが、本を読み、勉強し、知識を蓄えるよう懸命に努力すれば、より良い生活や将来が約束される。それまでは、浪費をせず、できるだけお金を貯め、本を買い、ひとかどの人間になろうと決心しなさい。そうすれば尊敬される地位（“honorable position”）にもつける。」（49）このように大人と話しながら、ディック少年は社会的に是認される経済的水準、社会的地位、そして道徳的品性を持つ、立派な（“respectable”）人間になるという目的と、それを是とする価値観を植えつけられる。彼は「前はかまわなかったが、今は無知でありたくない。尊敬されるような（“respectable”）人間になりたいと思う。」（68）

このベストセラー小説では、靴磨きで金を稼ぐ主人公の孤児の少年が、大都会の誘惑や危険のなかで、様々な少年や大人たちとかかわりあいながら、勤勉、誠実、節約を心がけるようになり、会計事務所の事務員として働くようになる。仕事ぶりによっては将来昇進もありうる。貯金もするようになった今、靴磨きをしていた一年前とは大きく異なる彼の「大望（“Dick’s great ambition to ‘grow up ‘spectable’”）は達成されたかのように見える。」（114）しかし、彼らなしではディックの成長が不可能だったことを忘れてはならない。良い友人、金銭的な援助や助言をする大人、金持ちの善意、そして「教育」（36）が不可欠なのだ。

主人公の「教育」の途中で語り手は、彼の成長ぶりを語る：「ディックは金銭より貴重なものを手に入れ、毎晩努力して学んだ結果、大きな成果を得た。よく読めるようになり、きれいに文字も書け、計算もできるようになり、文法と地理の知識も増えた。…今では彼は立派になるためには努力しなければならないことが分かった。」具体的な到達目標、努力の様子、学びの強い動機（“desire to improve”）が言及される。しかし語り手は「忘れてはならないのは、彼が生まれつき賢明（“smart”）だったことだ」（86）と念を押す。

But Dick had gained something more valuable than money. He had studied regularly every evening, and his improvement had been marvelous. He could now read well, write a fair hand, and had studied arithmetic as far as Interest. Besides this he had obtained some knowledge of grammar and geography. If some of my boy readers, who had been studying for years, and got no farther than this, should think it incredible that Dick, in less than a year, and studying evenings only, should have accomplished it, they must remember that our hero was very much in earnest in his desire to improve. He knew that, in order to grow up respectable, he must be well advanced, and he was willing to work. But then the reader must not forget that Dick was naturally a smart boy. His street education had sharpened his faculties, and taught him to rely upon himself. He knew that it would take him a long time to reach the goal which he had set before him, and he had patience to keep on trying. He knew that he had only himself to depend upon, and he determined to make the most of himself,—a resolution which is the secret of success in nine cases out of ten.

(86)

ディックは生まれつき賢明で、決断し、実行したから成功したのであり、賢明でなければ成功しなかったのだ。靴磨きの路上生活は、彼の資質や能力を引き出し、強化し、自助努力の必要性を教えるものだった。彼は目的を定め、その長い道のりを努力し続けることを決断したが、「決断することがほとんどの—10の成功のうち9の—成功の鍵なのだ。」（86）決断し、努力し続けられるというのも、才能である。生来の能力であり、資質であり、「賢明さ」なのだ。忍耐や強い意志で努力を続けることは重要である。しかし、決断し、努力できるという才能が不可欠だとすれば、この少年少女向け成功指南のベストセラー本は、この点でも決定論に立脚したものだと言える。

この本の出版により、孤児の〈貧困〉などの社会問題や教育のあり方などもクローズアップされただろう。しかし小説では、決断して努力を続けられるという個人の生来の能力・才能が成功するか否かを決定すると主張される。教育における決定論的考え—良き素質を持って生まれた者が成功すること—そして成功には大人による慈善や教育が不可欠であることなど、孤児の〈貧困〉から当時の教育目標や望ましい人物像など、社会や大人の教育観のリアルが明らかになるのである。

2-3. 「アメリカは私が創る」と少女は言う

アメリカは移民の国である。時期により様々な地域から、多くは祖国で〈貧困〉に喘ぐ人々が、そして民族の抑圧に苦しむ人々が、新天地を目指してアメリカに渡った。Anzia Yezierska (1885?-1970), “How I Found America” の10歳の主人公少女はロシアでの貧しい生活とユダヤ人差別のため、「黄金の国アメリカの、黄金の伝説」(112)を信じて、海を渡ってきた。ロシアとは異なり、アメリカが夢の地と思われたのは、皇帝(Czar)がいず、気候も良く、食べ物に困ることはない、秘密警察に連行されることを恐れる必要もなく、公道で自分の考えや思いを自由に口にすることができる、人生でやりたいことができると思じたからである。人種/民族や宗教による差別もなく、キリスト教徒もユダヤ教徒も皆兄弟である。身分の上下(貴賤)がなく、大統領が国民一人ひとりと握手する。「学び・知識が乳と蜜のようにどこまでも流れる」(113)場所である。無料で学べ、図書館を利用するのも無料だから、そこで好きなだけ学べる。彼女が学ぶことや学校にこだわるのは、自分に考えがあっても、それをどう表現してよいか分からないからであり、また「自分のなかで窒息している考えが、自分をばらばらにしないためである。餓死寸前の人に食べ物が必要である以上に、[彼女には]学校が必要である。」(119)

しかしアメリカで経験するのは、幻滅ばかりだ。そして相変わらず貧しい。工場では児童労働として搾取され、工場長は冷酷である。追い立てられ、一家は住処を失う。そして孤独である。「工場の同僚少女たちが自分を見捨てるからではなく、卑しく浅ましいので、涙が出る。…人間というより、生き残るために生きながらに互いを食い尽くさねばならない野蛮人の中にいるような気がする。」(117)

この10歳の移民少女が特異なのは、高い精神性、向上心、そして強さを持つことである。彼女にはアメリカをより良い国にするアイデアがある。世間知らずで盲目的だと批判はされうるが、自分たちがアメリカを創っていく、いけるのだという自負や固い信念がある。辛いことがあっても「空を見上げ、夢を見、自分が奴隷ではなく人間になれるチャンスがある新世界アメリカのことを考える」(119)強さがある。「どうしようもない無力さが力の源となる」(116)のだ。少女は機械のような労働力としてではなく、ここアメリカで人間として生きたい。自分を単なる労働力として見るのではなく、自分の心や感情や考えることにも注意を払ってほしい。自分の言うことや考えに、聞く耳を持ってほしい。

“I didn’t come to America to turn into a machine. I came to America to make from myself a person. Does America want only my hands—only the strength of my body—not my heart—not my feelings—my thoughts?” (115)

「暇があれば考えることもできる。まずは職業訓練をして生計を立てること、食べていくことが重要である。あなたがアメリカへ来たのは間違いだったのではないか」(121)と言う商業学校の先生に対して、少女はこう反論する。

“I came to give out all the fine things that was choked in me in Russia. I came to help America make the new world.... They said, in America I could open up my heart and fly free in the air—to sing—to dance—to live—to love.... Here I got all those grand things in me, and America won't let me give nothing.” (121)

少女が持つのは現状に対する不満とやるせなさである。

ナイーヴながらも自分が新しいアメリカを創るという気概を持つ主人公が救われるのは、彼女のよき理解者である、妹の高校の先生と出会った時である。小説は移民少女とこの女性教師の人物造形と邂逅に焦点が当てられる。これがこの小説で〈貧困〉から発展するより深いテーマであると言ってよい。この教師は職業学校の教師とは異なり、移民の少女である主人公からも学ぼうとする謙虚さがあり、彼女に言う：「表現されなければ煙になってしまう神聖な火のようなものを持つ人がいる。あなたを苦しめる利己主義と自己本位は、抑圧によってくすぶっている煙にすぎない。」先生は少女の本質を見抜いているようである。さらに、「あなたには話し相手が、自分の考えを聞いてくれる人が必要であり、自分がいつでも聞き手になってあげられる」(126-27)と少女に告げ、Waldo Frankの詩“*Our America*”を読み聞かせる。

We go forth all to seek America. And in the seeking we create her. In the quality of our search shall be the nature of the America that we create. (127)

少女には、自分を理解してくれる大人が必要であった。この女性教師との会話で、少女は悩んできた日々が無駄ではなかったことを知る。彼女は自分が、アメリカで精神を軽んじる物質主義(“materialism”)に阻まれ、誘惑されながらも、自分が良い仕事や良い生活を願ったり、それに満足するのではなく、どんな逆境にあっても高い精神性を求め続けてきたことをうれしく思う。そして彼女はこの探求が「アメリカの魂」(“the soul—the spirit—of America” 127)であることを知るのである。

移民の少女の物語は、彼女が何を考え、何を悩み、そして誰の助けによって「アメリカの魂・精神とは何か」を知ったかを語る。難題である。しかしその答えの一つが10歳の移民の少女によって見出される。少女と、彼女に寄り添った女性教師の人物造形と、二人の会話を通して、アメリカとは何か、アメリカの魂・精神とは何かが示唆される。答えは内部からは発見できない。移民という外部からの眼で、そして移民であるこの作家によって、見えるのである。〈貧困〉に喘ぐ移民の少女が主人公の20頁足らずの短編小説が、大きな文学テーマに発展しているのだ。

3. 超富豪転じて極貧、そして浮上—脱構築される〈貧困〉と身体と言説

Cosmopolis (2003) は高度テクノロジー社会と経済システムにおける覇者の2000年4月のある一日に焦点を当てているから、一見〈貧困〉とは縁がないようである。しかし小説は、「普通の人」が大富豪になり、投資に失敗して一文無しになりつつある顛末を語る。28歳の主人公を待っている

のは従来の意味での〈貧困〉であろうか。貧しくはなるだろうが、〈貧困〉の概念も貧困・裕福の二元論も、ここまでアメリカ文学を論じてきたものとは異なるマトリックスを想定する必要があるようだ。

この小説で興味を引くのは、テクノロジーの目覚ましい発展やグローバル化の下での経済的革新や社会環境の変化を背景にした、主人公の欲望と身体のある様である。テクノロジーを駆使して大金持ちになったこの勝者には、生の躍動 (*élan vital*/life force) が感じられない。不可解なほどに自虐的だし、貧しかった頃や父親との生活に郷愁すら感じているようだ。自暴自棄とも言えるほどに時代やシステムに抵抗しているように見える。『コズモポリス』に書き込んだ主要なテーマが「力、テクノロジー、暴力 (violence)、テロリズム、群集、現代文化の動きや対抗文化」(Morrison 1) であることに、特に反論はなかろう。しかし、グローバル化とテクノロジーの言わば「高原^{plateau}」期に、人間の欲望や身体がいかなる様相を呈してくるかという興味深いテーマを扱っていると考えられる。貧困・富裕の二元論で捉えられてきたものが、欲望・身体のあるように関する対抗ナラティヴを生み、希望を示唆する。〈貧困〉と身体はこれまで論じたものとは異なる言説を引き出すのである。

『コズモポリス』で描かれる世界は「光線によって築かれた最先端の空間」(102)であり、コンピューターとインターネットが世界中に浸透している。主人公 Eric Packer は「彼が死んでも、彼は死なない。世界が終わるのだ」(6)とまで登場人物の一人に言わせるほどの成功者だ。しかし「惑星に植民できるほどの金を儲けた」(129)彼は、この日一日でそれを失う。作者デリーロは、この高度テクノロジー社会の具体的な状況を、エリックの理論担当主任である Vija Kinski に語らせている：すべての富は富のための富になってしまい、お金はその物語的な性質を失い、それ自体にしか語りかけなくなった；資産という概念も日に日に、毎時間ごとに変わっていて、権力に関するものではなく、個性や能力とも無関係である；時間は自由市場システムに取り込まれており、現在というものは見出しにくい；未来はサイバー資本によって作られ、制御不能な市場と巨大な潜在的投資力の未来が常に世界を支配するようになった。(77-79) エリックは想像を絶する、制御しきれないシステムを扱い、成功した。しかし今日、時空間の加速を正すような何かが、世界を正常に戻すような何かが彼に起ころうとしている。現在の経済システムと勝者エリックの限界と、何らかの揺り戻しの可能性が示唆される。彼女の言葉通り、彼は今日、金をすべて失うが、「生きることを始められる。」(107)一文無しになって〈貧困〉が待つてはいるだろうが、異なる概念で捉えるべき〈貧困〉であり、彼の対応もこれまでとは異なると想像される。希望という名の〈貧困〉とでも言ってよかろう。真に生きることを始められるからである。〈貧困〉には新しい希望が胚胎しており、それを生み出すのが身体である。この小説では時間、貧富、身体、ことばなどの概念が脱構築される。

現代は線的時間言説での「現在」というものが、そしてその緊迫した時間を意識することも、そ

の流れを実感することも、困難な時代だ。ダウの劇的上昇、ネットのスピード、サイバー資本には確たる過去も記憶というものも存在しないからだ。この時間論が小説に、エリックの理論担当主任の言に反映されている。かくして、我々は未来に生きることになり、「現在」も身体性もますます希薄になっていく。ウェブや新しい技術の言語が支配するなかで、多くの言葉が時代遅れになっていき、消滅する。主人公のリムジンに搭載されたデータの図表のなかには、「鳥の羽などの有機的な形状を結びつつある」生命が「ことば」を発している。その「生命圏のうねり」(24)の「ことば」を聞き取らねば、グローバル経済の勝者にはなれない。“pictorial language”の一種、新しい言語である。

時代の成功者エリックはこのような時代の変化に満足しているのだろうか。この日、大統領の訪問で交通規制が実施され、有名人の葬儀パレードや映画ロケがあつて困難ではあるが、子供の頃からの馴染みの床屋に行くことに、彼はこだわる。彼が床屋にある、毎年同じ石油会社のカレンダー、いくつもある鏡、椅子に郷愁を覚えているのは、一見奇妙で不条理なようだが、それが象徴することは重要である。それぞれ、線的时间と過去、鏡に映る自分自身つまり身体性/実体性、リムジンの中でスパイカメラが常時回転していることとは異なる旋回—これらのものへの郷愁である。子供の頃から父に連れられて行った床屋で理髪師の Anthony Adubato は、時々話題を加えながら、いつも同じ父との思い出話をする。ここでエリックは、父との思い出、記憶、線的时间を回復する。床屋に行けば、失われた今・ここ、躍動する生命を取り戻し、静止していた現在という時間が線的时间の流れのなかで再び流れ始める。もちろん、彼はこのことを意識してはいまい。しかしこれらは、床屋へ行くことにこだわる彼の身体の無意識の欲望なのだ。システムの欲望に抵抗する身体は、自ら時代のアンチテーゼの言説を密かに発している。

エリックはチップやディスク上で、データとして永遠に生きることを希求してきた。肉体は交換可能であり、余分なもので、捨て去りたいとすら思う。不滅、永遠の生を望み、毎日の健康チェックを欠かさない。現在の身体は、もはや実体的なものではない。超音波心臓診断装置などで情報の波に変換される。身体・肉体はまったく異なるかたちで存在しているのだ。しかし、彼の不滅への夢を阻むのが、この日彼が何度か体験する痛みであることを我々は見落としてはならない。痛みは身体から発せられる「ことば」であり、彼の不自然なほど旺盛な食欲も性的欲望も同様だ。小説は、この痛みが徐々に彼に物質的な身体性を自覚させ、彼を現在の経済・社会システムから自由にしていくことを物語る。リムジンの中で毎日行う前立腺の触診の際に感じる痛み、ボディガードにスタンガンで自分を撃たせた時の電気ショックの痛み、そして元従業員の逆恨みから銃で撃たれた時の苦痛である。「理性の機能を剥奪されて、奇妙に高揚し」、痛みのなかで、彼は「大脳新皮質の影響下から脱し、脳の下等な領域と調和し、直感的かつ正確な行動を採る必要から、あるいは独自の判断をし、独立した主義と信念を貫く必要性から開放される。」(115) 合理性や理性から自由になるのだ。痛みを通して、エリックは「自分自身を、変換しようのない自分を知る。」何度か

肉体的苦痛を体験した後に、「物質的なもの、偉大なもの、記憶、感情」の価値を知る。こうして彼は「世界を勝ち得て」(207)、真に生きはじめる。様々な文化の差異を消失させるグローバル経済システムとテクノロジーの時代に、独自性、現在や過去・記憶、物質的なもの、不安などの感情を、痛みを通して回復する。痛みを通して、テクノロジーではなく身体として自分がまさに生きていけると言える世界に回帰する時、彼は個としての分別以前の、いわば自即他の世界を体験する。世界における本来の自他の関係性を回復するのである。

現代はいわばグローバル化と高度テクノロジーの高原^{plateau}であり、転換点であることは、9.11事件以降明らかになったと言える。このような時代状況にあって、人間同士の繋がりネットワークは不可能なかも知れない。しかしそれゆえにこそ、意識的であれ無意識的であれ、人は原初的なつながりを求めて現代の大都市をさまよい、彷徨する。大富豪エリックが床屋に行くことにこだわるのもこれが理由なのだ。彼は痛みという「ことば」が語る物語を聞くことにより、システムの中で失われた今・ここが回復され、現在という時間の時計のスイッチが入り、真に生き始める。その前に、エリックは三度、人間同士の繋がりと共に感・一体感を示唆する「ことば」を聞くことになる。テクノ・レイヴでの一体感、ラップ・ミュージシャンの葬列での一体感、そして映画のロケに加わって何百人ものエキストラたちと共に裸で暑いアスファルトに横たわった時の一体感である。この時、痛みと同様に、制度的言語とは異なる「ことば」が彼の身体に、皮膚に、同じように生きる自分の、そして他の人々の物語を語る。そして最後に彼は、固有性、時間・記憶、物質的なもの、不安などの自然な感情を、「世界」を取り戻す。この点では、『コズモポリス』は28歳の現代社会の覇者の自己形成小説^{bildungsroman}だ。グローバル化と高度テクノロジー社会にあって、まがいものの超富豪ではなく、本来の、真の自己を回復する過程である。小説の最後ではいまだ仮想の〈貧困〉であるが、それと身体の欲望の言説は富裕・貧困の二元論ではない対抗ナラティブ/言説と希望を用意しているのである。

まとめにかえてーアメリカ文学と希望のレトリック

アメリカ文学が〈貧困〉にどうアプローチしているかを見てきた。様々な小説が、〈貧困〉のリアルからその世界を押し広げ、文学のリアリティを獲得していった。そこで語られるのは、都市生活や物質文明に対するアンチテーゼ、人間/自己礼賛、新しい女性の生き方、移民や家族や共同体などである。そして最後に、『コズモポリス』では身体・欲望という、従来の富裕・貧困の二元論に対する対抗言説が示唆されていることを論じた。それにしても、この小説に見られる身体のロマンティズム、そしてその他の小説の底流に流れていると思われる楽観主義的傾向は、アメリカ独自のものであろうか。文学理論家の Eagleton は一般論化することの危険を承知した上で、以下のよう述べている：

[The United States] has refused to take the point of Bertolt Brecht's dictum:

“Scepticism can move mountains.”

The British, by contrast, have no such credulous trust in the magic of the mind... There are, of course, plenty of Americans who refuse the lie of the omnipotent will... Working people, for example, tend to be more realistic than their superiors, since they are closer to the ground. For those further from the facts, optimism is easy, but realism is fatiguingly hard.

One reason why Americans are encouraged to be hopeful is that gloom is felt to be politically subversive. (140)

Europeans tend to see optimism and pessimism as ways of judging situations, whereas Americans see them as ways of creating them... Optimism... is a force which can fashion what you desire, rather like a wizard's wand.” (141)

イーグルトンの言うように、「ヨーロッパ人が楽観主義や悲観主義を状況判断の方法と考える一方、アメリカ人は状況を作り出す方法とみなす傾向がある」(141)なら、アメリカ人の楽観主義やロマンティシズムは、個人主義とアメリカン・ドリームの問題などと共に、アメリカとアメリカ人、そしてアメリカの文学を彩っていると言える。ロマンティシズムや楽観主義によって、未来は創られる。悲観主義は停滞、いや、後退である。これからのアメリカ文学も、楽観主義の希望のなかから、さらなる文学のリアリティを生み出していくに違いない。

Cosmopolis についての議論は、2014年岡山大学文学部プロジェクト研究「貧困をめぐる学際的研究」の研究会での発表と、同年文学部公開講座「貧困社会への多様なアプローチ——様々な視点から『貧困社会』を見つめる」の一環として10月4日に「アメリカ現代小説に描かれた貧困と希望」で話した内容と、基本的には一致する。本論文は、これらを出発点として、より広い視点からアメリカ文学と〈貧困〉という問題を再考し、議論を深めたものである。アメリカ文学・文化史については、笹田 他編、森岡・片淵 編、渡辺などを参考にされたい。*Cosmopolis*論については拙論「超富豪転じて極貧の生き直しと身体の問題——Don DeLillo, *Underworld* (1997) と *Cosmopolis* (2003) をめぐって」(『岡山大学文学部紀要』第61号、2014年7月、pp. 35-45) も参考にさせていただきたい。内容・表現に重複する部分があることを断っておく。また、アメリカ文学と〈貧困〉を論じるには、たとえば Hapkeあるいは Coles他編などを参考にしながら労働者階級の文学テキストから出発するのも一つの方法であろうが、別の機会に行いたい。

引証文献

- Alger, Horatio, Jr. Hildegard Hoeller ed. *Ragged Dick or, Street Life in New York with Boot Blacks*. New York: Norton, 2008.
- Eagleton, Terry. *Across the Pond: An Englishman's View of America*. New York: Norton, 2013.
- Yeziarska, Anzia. *How I Found America*. New York: Persea Books, 1991.
- Coles, Nicholas and Janet Zandy eds. *American Working-Class Literature: An Anthology*. New York: Oxford University Press, 2007.
- 笹田直人 他編。『概説アメリカ文化史』。京都：ミネルヴァ書房、2002。
- 猿谷要。『検証 アメリカ500年の物語』。東京：平凡社、2004。
- DeLillo, Don. *Cosmopolis*. London: Picador, 2004.
- Tokarczyk, Michelle M. *Critical Approaches to American Working-Class Literature*. New York: Routledge, 2011.
- Hapke, Laura. *Labor's Text: The Worker in American Fiction*. New Brunswick: Rutgers University Press, 2001.
- Baym, Nina et al eds. *The Norton Anthology of American Literature Fourth Edition Vol. 1*. New York: Norton, 1994.
- 森岡裕一・片渕悦久 編。『新世紀アメリカ文学史—マップ・キーワード・データー改訂増補版』。東京：英宝社、2007。
- Morrison, Blake. "Future Tense." *Guardian* (17 May 2003) : n.page, Web. (accessed 8 Apr. 2014) .
- 渡辺利雄。『講義アメリカ文学史 入門編、Vol. I-III、補遺』。東京：研究社、2007-11。